

北国の時間

雪を屋根から下ろす状態は、^{(ぼくし)おう}牧之翁^{ごと}ののべた如く、初めは屋根から地上に下ろすのであるが、一夜に五尺六尺という降雪を見るのが稀でないのであるから、家屋の傍^{そば}の空地^{あさち}、道路は^{たちま}忽ち下ろされた雪を以て高くなり、やがては屋根の高さ以上に達し、一々それを運び上げなければならぬのであるから、その労力は馬鹿馬鹿しいほど大変なものである。かかる費用は^{すべ}凡て不生産的な労力の消費であって、絶えずこういう仕事に力を尽さなくてはならぬことを考えただけでも、東北一道十県の住民の生活が豊かにならず、文化的の恩恵^{よく}に浴すことのおそいのも当然であることを考えねばなるまい。

『雪』中谷宇吉郎 初出：岩波新書(岩波書店)1938(昭和13)年11月20日

第一 雪と人生 より

※ 現在も岩波文庫(岩波書店)より書籍販売中

この文章は、雪の結晶や人工雪の研究で知られ、北海道大学理学部の教授を務めた中谷宇吉郎によるものです。中谷はその著書『雪』の第1章「雪と人生」の冒頭で、山形県新庄に設置された「積雪地方農村経済調査所」に出入りする中で見聞きした「雪の人間に与える損害」に言及する導入として、鈴木牧之の『北越雪譜』(*1)を引用したうえでこの文章を書きました。

雪下ろしや除雪の大変さが臨場感をもって描写されていますが、それらが雪国における、公共交通機関、道路などの経済活動基盤の発達に伴った近代的な文化の発展の遅れにつなげて語られていることが目を引きます。

雪の物理学的研究の紹介を中心とした『雪』の冒頭にこのような話が差し込まれていることに対して、中谷本人は、日本における雪研究の必要性の説明のために「一番目につきやすいかつ気につきやすい雪の話をごへ持って来たまでである。」と本文中で述べていますが、石川県で生まれ育ち、北海道で雪の研究を行いながら暮らした中谷の実感が込められているようにも感じられます。

雪国に暮らす人々にとって、車の雪下ろし、玄関先や駐車場の雪かきといった作業は冬の生活の一部となっており、これらの作業にかかる時間が無視できないものであることを私たちは身をもって知っています。それは決して喜ぶべきことではないかも知れませんが、一方で、雪国で費やされるこの特別な時間の中で、たとえば「ササラ電車」(*2)のような雪国ならではの発明が生まれたことも事実です。

ここで紹介する「GoNOW」は、雪国に流れる時間の中で続いてきた創意工夫に満ちた研究開発の、現代における延長として位置付けることができるでしょう。このような研究開発によって生み出される雪国の新たな時間が、雪国の文化発展につながるのかも知れません。

(*1) 鈴木牧之著、天保12年(1841年)刊

(*2) 1918年(大正7年)の電化開業以来、札幌電気軌道(札幌市電の前身)では作業員による人海戦術で除雪作業を行っていたが、降雪量が多くなると作業が追い付かず運休に追い込まれる事も度々であった。より能率の高い除雪方法が求められ、同社の技師長である助川貞利を中心とする技術陣が海外の文献を参考にして研究開発した結果、1920年(大正9年)に最初のササラ電車が登場し、1925年(大正14年)に実用化された。(https://ja.wikipedia.org/wiki/ササラ電車)